別れ霜不二もあり〳〵見ゆる朝　大坂　きょ女
人の氣も浮かるゝ日なり春の風　栃木　さだ子
筆持て居眠る人や日の永き　高崎　梅の舍
どちらへも風に馴染みて糸柳　仝
野に山に目うつりのする春日かな　相模　一笑
彼岸會や佛壇からも野の匂ひ　仝
今日も又誘ひ出されて春日和　武州　芳山
乘り捨てし汀の舟や夏の雲　下總　梅泉
雲見えて今日も雨なき暑さかな　仝
初雷や雲の切間を星一とつ　遠州　愛水
夕立や鬼の樣なる雲の出る　仝

三光

天、芽柳や水に崩しれ川普請　川越　野鳥
地、遠足や陽炎もゆる野のあたり　東京　春綾
人、その奥に赤き鳥居や葉の櫻　長野　雪舟

追加　無一菴奇零

風船を見失ひけり春の雲
兼々婆々の成田詣や春の風
初螢草をはなれて水の上

うんどう會

鶴齡

老いたる冬は去りぬ、うら若き春は來りぬ。ゆたかなる日影あみつゝ萌え出るわか草のつみなき幼な兒なつかしみ一日某附屬幼稚園に訪れぬ、廣やかなる遊びの庭春風のどかに吹きわたりて今盛りなる梅が香清し、小蝶形に結ばれたる五色のリボンの赤き袴つけたる人の影おひつゝ彼方此方飛びちがうもうつくしく、水兵の服つけたるはかなたの砂場に打ち群れて手に手に小さき木製の鍬おつとり今し築城の練習。此方のベンチによりかゝれるは咲き匂ふ梅花を櫻に見立てゝや見よ花見よとうち喜ぶ、一ノ組の幼兒なるべし七ツ八ツ許りなるが繋り合ふ常磐木の下に集ふよと見るまに一人の女兒の拍子とるにまかせ歌ひ出だせる、

小さき我等によき事を敎へ給ひし師の惠
ながく遠く忘るまじ大きくなりて後までも

時に彼方の入口に濃き紫の袴見えて廿をば二ツ三ツ超えたらんと思はるゝ人の出で來給ふや「アラ先生！」と日さとき一兒の駈け出すや聞まほしと思はれし二の歌はさしをかれつ雛鶏の餌をまく少女に走るが如く衆兒我も我もと群り行きぬ保姆の君なるべし兒等に取りまかれつゝ

オヽ皆さん元氣で、今日はいゝお天氣ですね先生の御恩の歌大そう丈手になりましたねモーいくつ眠ると小學校へ御出るやうになるでせう

「先生！モー二十許りねるとでせう？」

「ソーヨおうちではネおねエ様が女學校を御卒業私は幼稚園を卒業、お姉様の方では送別會をするんですッて」

—送別會て何?」

と口まめらしき赤のリボンの小女は問ひつ、保姆の君は笑み給へり好機會待ち得たる面持して、

「送別會といふのは長くお友達だつた方がお別れのときにする會です一ノ組でもしませうかモーすぐ御別れになりますから、隨分長いこと一緒に遊びましたね、」

かくて送別を意味せる運動會の相談。小さき幼兒等が腦裡より繰り出されたる思考面白し。

土曜日とはなりぬ天氣快晴　如何なる會の催さるらんと好奇心にかられつ再び同幼稚園を訪ふ、開會は午前一時と聞きしに九時頃已に父兄の來るあり小さき今日の主人公だち得意顏に彼方此方駈けまはりつゝ客人を案内する愛らし主も嬉しげなり客もうれしげなり。

練習生と覺ぼしきに案内せられて例の保育室に入る入口の壁には「子どもてんらん會」のはりたしあり愛らしや幼兒の思考にや室の中央の花瓶には梅の古木花まさに盛りなるを挿したり見えよく排置せられたる幼兒の机には青きテーブル掛かけわたして小さき手どもに作りなされたるうるはしの製作品扨ては愛らしの玩具など幼稚園は何もかも愛らし、

時たつまゝに來客父兄の數は增しぬ展覽會は大入り、小さき說明者は大よろこびなり折しも、

矢がすりの筒袖羽織も着物も等しきにカシミヤのゑび茶袴うかちたる少女人込の中をかきめぐりつゝ

オ子エサマ！オネエサマ！何處にいらすってアゝこゝに？、私の縫取り見て下すって？」

「澤山あるからどれがお前のかわかりませんでしたの、アゝそれですか倚麗に縫えましたね」オゝアルブムも出來てますれマア皆よくかいて居ますこと美代ちやんのは？」

「アタクシのネこれ！蝶々が變にかけたの、」

と笑ふ、傍に立てりし白髮の一老人、洋服つけたる凜々しげなる小兒の頭なでつゝ

「入園さした時には何もわからず泣いてばかり居たのに大人しうはなつたしこんなにマアいろんな事を覺えて……」

と感謝の情にたへぬらし、十時は來りぬ小さきベルは再び鳴りぬ小さき主人公達まづ入場、下座なる腰掛に着席、保姆の君は展覽會場に集まれる父兄其他に簡單にして心深き一應の挨拶來會の好意を謝して會場に案内せらるおのれも亦來客の一人として快よく入場を許さる、五間に八間の遊嬉室は旗花さては何かとうつくしう飾られたり幼兒の手になりしと覺ゆ、室の上坐壁に揭げられたる額中のフレーベル先生、今日わきて笑みませるやうに拜まるピアノのマーチに足並そろへて入り來る二の組三の組の小さき客人達、保姆及び小さき主だちに愛らし會釋して設けの席に着く招きに應じて來りたる本校生徒さては附屬の人々等、來賓總て百七八十名、ピアノの合圖に一同起立三浦とかいふ、男の子總代として挨拶

「皆サンよくいらしやいました」

ときりきりとしまりたる口もとより唯一言！簡單にして力ある聲子供ながら男々し、

傍へなるオルガン物靜かにひゞくや頰紅に丈高きをのこ子梅の花の唱歌獨唱、夥しき來賓あるにも怖ぢたる景色なく元氣よく歌ひ終れり次いで女兒一同の遊嬉鑽と、雲雀。雲雀の歌の末「うちのかあさんにおみやにしませう」の句、並み居ませる母君達如何に聞きけむ右終りて男兒の体操活潑にて愉快なり三の組の小さき人達稍無事に苦しみ給はずやと見ゆるに保姆の君「こなびは客人方のを聞きまつらむとて一ツ二ツ此の君達の飛び入り唱歌あり、次いで男女兒手を携へてプロネード。汽車の歌うたひつゝ足並正しくピアノの音ニ合ひて小さき兵士見る心地す一列となりし行は席にはつかで室外に出で行く。客人のみとなり殘されつゝこたびは何ならむと壁上のプログラムのそくに「おはなし」とあり二三の小さき辯士の愛らしく面白き話終るや室外に足踏の音勇ましく「前へ進め」の號令と共に聯隊旗捧げ持てる二人の小大將につゞく二列の兵士勇まし小兵といふて木製の鍬の鐵砲肩にして進軍、室の中央にて二隊にわかれ敵味方、よろしき所に陣をとる戰鬪準備は間もなく成りぬ

氣ヲ付ケ。右ヘナラヘ。番號。ネラヘ。ウテ。ドドンドンドン〳〵〳〵〳〵

觀戰の老幼來客歡呼湧くが如し「休戰！」の號令の下に兩軍鳴を靜め、敵味方相和する始めの如く再び二列となりて喝采のうちに退出。

戰は終りぬ戰場物靜かにしづまりぬるとき赤十字と小旗手にせる二十餘名の小さき看護婦の君達列亂さずしとやかに入り來り室の中央に圓形に列ぶ砲筒の響遠ざかるあとには虫も聲たてず倒れし人の顏色は野邊の草葉にさも似たり。

擧動しづかに歌しめやかに白きハンカチ取り出してまくや繃帶白妙の淸き心のいつくしさよ、先きの老人嬉しさに泣くめり、

戰爭は終りぬ看護の實はあがりぬ觀客坐ろ凱旋の祝賀を聯想するの時太鼓のひゞき笛の音さては拍子木、鈴、ラッパ隊伍正しく進み來る樂隊行列。女兒も男兒も小旗持ちつ廣瀨中佐の歌節勇まし。

次いで女兒數名紙折の三方に何物をか入れたるを捧げ來る、

「これは皆さまに一ツ宛とって戴きたくてみんなで摺みました

から」

年上なる女兒なるべし挨拶終りたる後一人一人に分ち與ふるを見れば七色の色紙もて摺みなせる花蝶其他。開かば一葉の紙片なめれど幼き人の心こめたる。贈られつる人の心や如何に

贈物配附の間樂隊行列の君達着席、一保姆の奏樂に會場物靜かになりし時ピアノの合圖に一同起立、君が代老幼、親子、師弟、主客、心よりの萬歲三唱、御國長久の繁榮を祈りて解散、

愉快なりし運動會！愛らしの送別會や、